

## 清朝の眺望2（清朝中期から後期まで）

康熙帝・雍正帝・乾隆帝三代の時代は、「三世の春」と称えられ、清朝で最も栄えた時代ではあったが、その繁栄の内部に巣くっていた、さまざまな病原菌が、乾隆期の中頃から徐々に増殖し、ついに、病に蝕まれた帝国は、滅亡への一途をたどる。この、崩壊しつつある、中国最後の王朝と、それを取り巻く世界を俯瞰してみよう。

1796年（嘉慶元年）、乾隆帝から讓位を受けて、第七代皇帝嘉慶帝が即位した。

彼の即位とほぼ同時に、**白蓮教徒の大反乱**が発生した。この反乱は約十年間つづき、数十万とも数百万ともいわれる人民が参加したという。白蓮教は、南宋時代からある浄土教の秘密結社である。死者1億人余という。

乾隆年間、民衆や白蓮教徒の反乱が各地で起こった。それらは鎮圧され、白蓮教主は捕らえられ流刑にされたが、危機感を持った乾隆帝は、白蓮教鎮圧の命を出した。全土で苛酷な取調べが行なわれ、多数の関係のない民衆が犠牲になり、官吏たちはどさくさにまぎれて金銭を収奪した。ついに、民衆の不満が大爆発、1796年、湖北省で、教団あげての反乱が起こり、それは、陝西省、四川省、河南省、甘肅省に飛び火した。清朝はこの乱の鎮圧に、膨大な戦費を使い、国庫は空になり、それが増税につながり、さらに民衆の不満をつのらせていった。また、乱の鎮圧に郷勇（漢人の地方民兵）と団練（自衛武装集団）の力を借りなければならず、正規軍の腐敗と無能ぶりが露呈し、清朝正規軍は権威を失った。

1757年（乾隆22）、乾隆帝はヨーロッパ船の来航を  
広東（広州港）一港に限定し、ヨーロッパ諸国との貿易  
を「公行」という特許商人だけに認めた。この体制を広東  
体制といい、1842年までつづいた。

18世紀後半、茶の貿易はイギリス東インド会社がほぼ  
独占していた。そのころ、イギリスを中心に、ヨーロッパ  
で喫茶が大流行、茶の需要が急増し、輸入額が飛躍的に増  
大した。イギリスは中国に毛織物を輸出したが、その輸出



英国東インド会社本社 1817年ロンドン



アヘン窟

額は茶の輸入額の半分にも満たなかった。当時、取引の決済には主に銀が使われていたので、イギリスから大量の銀が中国に流出し、イギリスは、茶による、莫大な貿易赤字を抱えることになった。この不均衡を解決するために、イギリスは貿易の自由化や北方の港を開くように要求し、マカートニー（1793年）、アマースト（1816年）、ネイピア（1834年）を特使として派遣したが、外交努力は、すべて失敗に終わった。イギリスには中国の絹や陶磁器や茶のように大量に輸出できる商品がなかった。そのころ、本国の銀を持ち出さないように圧力をかけられた東インド会社は、アヘンの密輸を思いつき、1780年頃には、インド産のアヘンを広東に組織的に密輸し始めた。その結果、アヘン中毒者は、上下の全国民に広がり、アヘンの輸入量は増加する一方になった。アヘンによる収入は、東インド会社のインド経営と、中国茶の購入にとつて、必要不可欠なものであった。

アヘンは、古くから医薬品として使用されていたが、清朝初期から嗜好品として用いられるようになった。それは、常習すると中毒し、衛生上害があるので、1729年、雍正帝はアヘンに対して禁令を出している。1796年、嘉慶帝の初仕事は「阿片禁止令」の発布だった。

アヘン密輸は功を奏して、19世紀初めには、アヘン輸入量は半世紀前の10倍。ついに中国側が輸入超過となり、中国からの銀の大量流出が大問題になってきた。アヘンは衛生上の問題だけでなく、銀の不足による銀高で、農民の税負担が増し、社会不安を拡大させた。清朝政府では、アヘン「弛禁」論と「嚴禁」論が対立したが、第8代皇帝道光帝は、アヘン「嚴禁」に決定し、当時、湖広総督だった**林則徐**をアヘン問題解決のために、特命全權大臣として広東に派遣した。



林則徐

## 第1次アヘン戦争

1839年（道光19年）3月、広東に着いた林則徐は、イギリスのアヘン商人からアヘンを提出させ、虎門の海岸に池を作り、そのなかで14000トンのアヘンと海水と消石灰を混ぜ、人民の目の前で化学処理で処分し、さらに強硬にイギリス人を排斥しようとしたため、広東在住のイギリス人と戦闘になった。10月イギリス政府は中国に対する武力行使を、反対論との僅差で決定した。1840年8月までにイギリス東洋艦隊は、広州ではなく北方の沿岸地域を占領しながら北上し天津沖へ入った。北京の目前の天津にイギリス軍が現れたので、動揺した皇帝は、林則徐を解任し、和平派の琦善を後任にして交渉に当らせた。イギリス軍は台風や伝染病を警戒して9月に一時撤退した。1841年1月、琦善は、イギリスと「川鼻条約」を締結。ところが、イギリス軍が撤回すると、皇帝は琦善を罷免し、条約を反故にした。怒ったイギリス軍は軍事行動を再開し、沿岸地域をつぎつぎに制圧していった。1842年7月、鎮江が陥落し、清国は敗北した。



英艦ネメシス号の砲撃で炎上する中国のジャンク船（1841年）



英国海軍の進撃ルート

8月29日両国は「南京条約」に調印し、アヘン戦争は終結した。この条約により清国は、賠償金の支払い、香港島の割譲、広東、厦門、福州、寧波、上海の開港、公行の廃止、領事の5港駐在などを約した。さらに翌年「虎門寨追加条約」について、1844年アメリカ合衆国と「望厦条約」、フランスと「黄埔条約」を締結し、列強諸国の、治外法権、関税自主権放棄、最恵国待遇条項承認などを認めねばならなかった。この不平等条約により広東体制は完全に崩壊し、中国の「半植民地」化が始まることになった。戦争の原因であったアヘン貿易も黙認された。

イギリスの戦争目的の一つは、自由貿易を強制して、中国を開国させ、自国の商品（特に綿製品）を買わせることであったが、綿製品の輸出額は戦後も横ばいで、その目的は達成されなかった。アヘン貿易は加速度的に伸びて、1850年のアヘンの輸出額は対中国輸出総額の約60パーセントを占め、一方、茶の輸入は輸入総額の約84パーセントを占めている。イギリスは、この戦争で、少しも貿易関係を改善出来なかったのである。

外交問題についても、イギリスは、北京政府との直接交渉を望んだが実現せず、期待を裏切られた。

さらに、戦後、広東では排外運動が盛んとなり、1850年、第9代皇帝咸豊帝が即位すると、北京政府は、一段と排外色を強めていった。このような結果に不満であるイギリス政府は、1854年（咸豊4）清朝に条約改正を要求するが失敗に終わった。

1856年10月8日、広州港で、イギリス船籍のアロー号が、海賊容疑で清朝官憲の臨検を受け、乗組員12名が逮捕され、イギリス国旗が官憲の手で引きずりおろされる事件が起こった。これは不当な逮捕であり、国旗引きおろしはイギリスに対する侮辱である、とイギリス側は抗議した。これが「アロー号事件」である。実際は、この船の登録は期限切れでイギリス船ではなかった。この事実をイギリス側は隠し、この事件を口実に中国問題を解決しようと、インドシナ侵略を企むフランスと共に出兵した。



アロー号を拿捕する清朝の官憲



1857年（咸豊7）末、『第2次アヘン戦争』（「アロー戦争」ともいう）が勃発した。

英仏連合軍が広東を占領し、天津に進駐すると、清朝は敗北を認め、1858年6月**天津条約**をロシア、アメリカ、イギリス、フランスの順に締結した。翌1859年、英仏公使が批准書交換のため北京に向かうと、清朝は、上海での交換を主張して、大沽で英仏公使たちを武力で撃退した。

1860年、英仏両国は大軍で再び進撃、10月北京へ進駐した。その直前、あわてた咸豊帝は熱河へ避難し、後を弟の恭親王奕訢にまかせた。北京に入城した英仏軍は円明園を略奪し焼き払った。そして、同月、英仏両国は清朝と**北京条約**を締結した。

天津・北京条約の主な内容は、賠償金の支払い。牛莊・天津・漢口・南京などの開港場の追加。内地旅行権。税率表の改正。子口半税の規定。外交使節の北京常駐権。キリスト教布教権。中国人の海外渡航公認。イギリスに九龍を割譲。アヘン貿易の合法化。華夷思想の廃止などである。

ロシアは、清朝を強迫して、1858年、**愛琿条約**を締結し、アムール川（黒龍江）左岸の地を獲得、ウスリー江以東の地（沿海州）を両国の共同管理地とした。つづいて、1860年、北京条約の調停をしたロシアは、その報酬として沿海州を割譲させ、その後その南端に軍港ウラジオストクを建設し、さらに南下する野望をふくらましていった。

アヘン戦争は、イギリス資本主義による中国侵略戦争であった。その敗北の結果、中国はイギリスを頂点とする世界市場構造のなかに組み込まれ、二千年来の中華思想秩序も、ついに崩壊して行くことになる。

アヘン貿易によって、中国の銀が国外に流出し、清国では銀が高騰した。農民は銅銭で生活し、税は銀貨で納めることになっていたので、銅銭を銀貨に換えて納税する。ゆえに、銀が高騰するとは納税額が上がるといふことである。アヘン戦争の頃には、銀は乾隆期の倍以上に高騰していた。農民たちは銀高騰や莫大な戦費による増税や横暴な軍人や官吏に苦しめられ、救いを求めて秘密結社に入り、群盗となり反乱を起こすようになった。

#### 太平天国の乱

（長髪賊の乱とも呼ばれた）

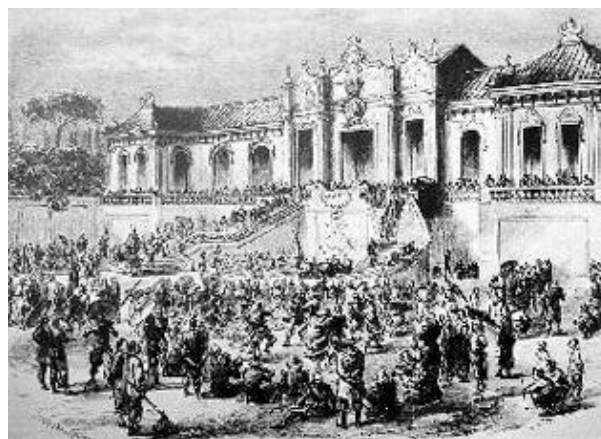
1850年（道光30）、第1次アヘン戦争終結から8年後、広西省金田村で約2万人規模の反乱が起こった。それは、洪秀全を指導者とする宗教団体の、拜上帝会が起した反清の乱であった。彼らは蜂起直後、国号を太



平天国とし、洪秀全は自ら、天王と称した。信者は、炭焼きや貧農、鉱山労働者、客家などであった。キリスト教の教義を取り入れた太平天国のめざしたものは、満洲王朝の打倒（滅満興漢）、地主制の廃止、私有財産の禁止、男女平等、アヘン・賭博・掠奪・迷信の禁止など腐敗した旧社会の変革であった。

1852年（咸豊2）彼らは、

金田を出て、湖南省を北上し、湖北省の武昌から長江を下り1853年（咸豊3）3月、南京を占領、蜂起から3年で軍勢は20余万に増えていた。南京は天京と改名された。この天京を首都として11年間、太平天国軍は、北や西で清軍や湖北省の江忠源の楚勇、安徽省の李鴻章の淮勇などの民兵軍などと戦ったが、1864年（同治3）7月、湖南省の曾国藩の湘軍（湘勇）によって天京が陥落、洪秀全は自殺し、太平天国は滅亡した。



英仏連合軍の円明園の略奪



1865 年頃の英国のデイ・ドレス  
機械編みレースのショールの流行



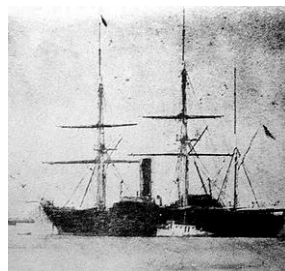
「カティ・サーク」  
19 世紀イギリスの快速貨物船



ターナー「グレイト・ウェスタン鉄道」1844 年  
ロンドン・ナショナルギャラリー



コンスタブル「干草車」1821 年  
ロンドン・ナショナルギャラリー



サスケハナ（黒船）

そのころ日本では、明治維新に向かって重大な出来事が起こっていた。

1841年、ジョン万次郎が高知沖で遭難し、アメリカの捕鯨船に助けられ、日本人として始めてアメリカに渡り1851年、日本に帰ってきて、幕末の日本で、通訳として活躍した。

1846年7月20日アメリカ東インド艦隊司令官のジェームス・ビドルが戦艦「コロンバス号」で浦賀に入港。

1849年4月17日アメリカ東インド艦隊のジェームス・グリーンが「ブレブル号」で長崎に来航。

1853年7月8日、日本を開国させるため、マシュー・ペリーがアメリカ東インド艦隊の蒸気船「サスケハナ」以下4隻の艦艇で浦賀に入港。（黒船来航）

1854年2月13日、計9隻の艦艇を率いて、ペリーが浦賀に再来し、「日米和親条約」を締結、日本を開国させた。同年4月25日、若き吉田松陰が下田沖に停泊していたポーハタン号に近づき、密航を企てて捕らえられた。

1862年5月、高杉晋作が、幕府使節随行人員として上海へ渡り、欧米列強により植民地化される清国の状況や、太平天国の乱を見聞して7月に帰国している。

1868年10月23日、**明治維新**。

そのころのヨーロッパは革命の時代であった。イギリスでは、産業革命が、ほぼ完成し、イギリスを中核とした世界貿易体制が確立していった。

1848年2月24日、マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』がロンドンで、発行された。

1859年11月24日、ロンドンでダーウィンの『種の起源』が出版された。

1865年、メンデル、チェコのブリュンで「メンデルの法則」を発表したが、学会では無視された。

1867年、マルクスの『資本論』第1部、ハンプルグで刊行。



第9代皇帝咸豊帝



洪秀全

乱の鎮定に功績のあった、郷勇やヨーロッパ人は発言権を増し、清朝の無能な正規軍を馬鹿にするだけでなく、清朝の命令をきかなくなった。この内乱は、甘肅省以外の清国全土に及び、死者は合計2億人にもなったという。乱の前の人口は約4億だった。

咸豊帝は、恭親王にすべてを任せて、熱河に逃亡したまま、1861年8月、結核で死んだ。享年30であった。死の2日前まで、趣味の芝居見物に熱中していたという。

咸豊帝には、第2夫人西太后との子である同治帝しか男子はいなかった。咸豊帝の死後、西太后は、幼い後継者を補佐するようにと、遺命を受けた8人の大臣らと争い、東太后（皇后）、恭親王と手を組んで、クーデターを起し、後見大臣たちを処刑して、権力を握った。

同治帝は1861年11月、5歳で即位し、西太后による垂簾聴政が始まった。



## 碑学派

漢碑や北朝碑を正統の書として学び、自己の書に取り込んでいった書人達を碑学派と呼ぶ。  
嘉慶から道光年間（1796～1850年）は金石学が勃興し、碑学派の書論家として、阮元や包世臣が活躍し、書の主流は帖学から碑学へと移っていった。また、碑学派の頭目の鄧石如や伊秉綏らの影響を受けた吳熙載や何紹基が活躍し、理論家の阮元と包世臣の出現によって、碑学派というものがはっきりと定義づけられた。

阮元 1764年（乾隆29）～1849年（道光29） この人の書作品は帖学系である。

字は伯元、号は雲台、諡は文達。揚州で生まれた。

1789年（乾隆54）の進士。

金石に詳しい清朝屈指の学者、政治家。戴震の学を継承。浙江・江西の巡撫、広東・広西・雲貴の総督を歴任し、各地で学者を育てたらしい。体仁閣大学士（内閣総理大臣）となった。

乾隆・嘉慶年間（1736～1820年）の考証学の集大成者で、言語や文字の研究から古代の制度や思想を説明しようとした。

1823年（道光3）、「北碑南帖論」「南北書派論」を発表、書の正統は北碑に伝えられ、法帖の書は何度も改刻されているうちに真意を失っている、と指摘し、書は北碑に学ぶべきだと唱えた。



阮元像



阮元「行書七言聯」1796年（嘉慶元年）

### 「北碑南帖論」「南北書派論」

南北朝時代の書についての論。

阮元は漢代の学問・文化を無上のものと考えていたので、書道の正統な書体を後漢代の隸書とした。

後漢代の隸書は魏の隸書に伝わり、魏の鍾繇を分基点として南北に二分されたとする書論。

「南朝」へは、鍾繇→東晋の二王→南朝→隋→唐まで続く紙の法帖系の流れ。隸書から二王の行草を通して隸意が失われたという。

「北朝」へは、鍾繇→西晋→五胡十六国→北魏→北朝→隋→唐まで続く金石文系の流れ。漢隸から直接楷書になったので隸意が濃く残っているという。



阮元「隸書五言聯」 北京故宮博物院蔵

包世臣

1775年（乾隆40）～1855年（咸豐5） この人の書作品は帖学系である。

字は慎伯（誠伯ともいう）、号は倦翁、小倦游閣外史など。書室は小倦游閣。

安徽省涇県の出身。涇県は古名を安吳県と言ったので、安吳先生とも呼ばれた。書家、

篆刻家、学者、書論家、政治家。嘉慶13年（1808）の挙人。進士には合格せず、

生涯幕友で終った。兵法にも詳しくなかったので、安徽省の巡撫に招聘されて兵士を訓練

したりもしたらしい。28歳の時、鎮江で鄧石如に出会い、鄧石如を生涯の師とする。

鄧石如没後19年目に『国朝書品』を著し、その中で鄧石如の書を清朝第一と称え、

や趙之謙らを始め、清末の書人に大きな影響を与えた。世臣は1820年、アヘン厳禁を主張して林則徐らに働

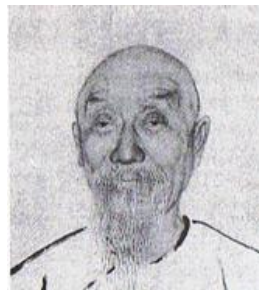
きかけている。世臣らの意見が反映して黄爵滋により上奏され、道光帝は嚴禁策の実施を決断したらしい。18

38年に江西省新喻県知県になったが1年で退官した。1839年、林則徐と会い、アヘン問題について協議し

ている。南京条約締結の時、世臣は南京に滞在しており『殲夷議』を書き、関係官僚に進言したが理解されな

った。南京に寓居中、太平天国の乱に遭遇し、避難の途中没した。彼は人民が変革の主人公であるという認識を

持ち、民衆の幸福を求め続けてきたが、それは、儒教的な国家体制維持のためであった。



吳熙載画「包世臣」像

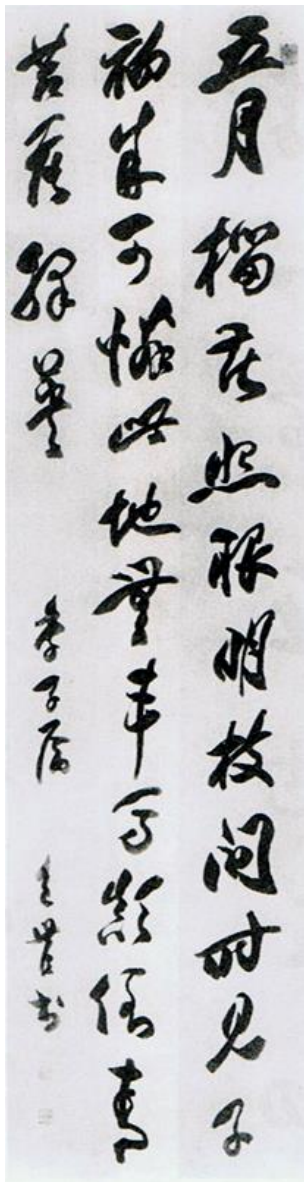


包世臣「額字・耐煩書舍」紙本 29.5×124.5cm 篆隸の筆意によって書かれた楷行書。

包世臣は、王羲之、王献之、歐陽詢、孫過庭、顔真卿、蘇軾、や董其昌などを学んだ。彼は、北碑を学ぶことの大切さを述べたにもかかわらず、自身の篆、隸、篆刻作品を残していない。行草書と楷書作品だけである。なぜだろうか。

彼の膨大な論文は、1844年『安吳四種』全16冊36巻の叢書として出版されている。その中に、芸術論集の『芸舟双楫』がある。これは、「論文」（文学論）と「論書」（書論）の二篇から成っている。この論書の部分は論書一と論書二に分かれ、論書一には、「述書上・中・下」や「国朝書品」、「答熙載九問」などが、論書二には「完白山人伝」などが入っている。包世臣の書論の中核は、「氣満」「双鉤懸腕」「実指虚掌」「逆入平出」「峻落反収」のことはで表される。

「氣満」とは、気が満ちることだが、「氣」とは、莊子の「陰陽風雨晦明」の六氣のことで、これは、宇宙の生命原動力（エネルギー）としての気のことであるらしい。彼の理想の書とは、氣満を実現したものである。それは、「平和簡静」「適麗天成」の状態をさし、精神内容と技巧が融和したものであり、その実例が鄧石如の篆隸楷書であった。そして、この「氣満」を実現するための技法が「双鉤懸腕」「実指虚掌」「逆入平出」「峻落反収」であるという。



包世臣「韓愈の榴花詩」七言絶句 紙本 195.7×50.9cm 側筆で書き、変化を出している。

五月榴花照眼明 枝間時見子初成 可憐此地無車馬 顛倒青苔落絳英 李子屬 包世臣書



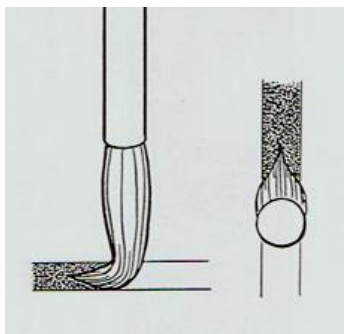


図2 正鋒（中鋒）

筆鋒を立てて、線の中を直行させる。鋒先は開いていない。このように鋒先を開かずかかれた線には篆意がある。

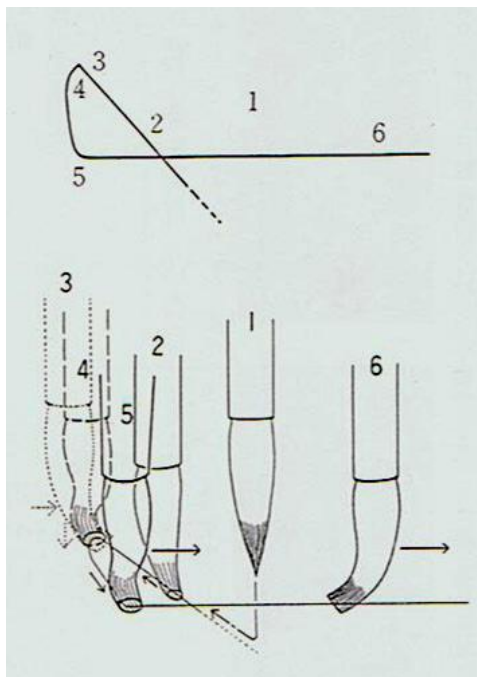


図1 逆入平鋪（中鋒・藏鋒）

「逆入平出」は、気満を実現するために最も大切な用筆法である、と包世臣は言う。  
「逆入」は、起筆を線の進行方向とは逆から入筆することである。「平出」は逆入で運んできた筆を、収筆部で立て直して、そのまま抜くことである。平鋪とは、「平らに鋪く」こと、鋒先を開いたまま運筆することである(図1)。鋒先を開いて書かれた線には篆意がある。作品全体に気満のある線を書くための用筆法が「逆入平出」であり、点画の形を篆書や隸書に似せるためのものではない。  
「逆入平出」の真の意味は何なのか？

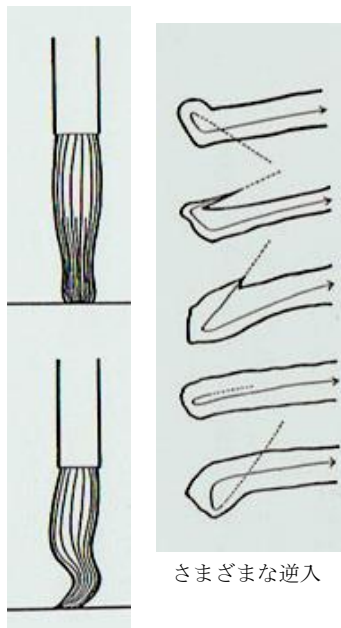


図3 峻落

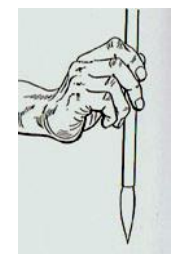
さまざまな逆入



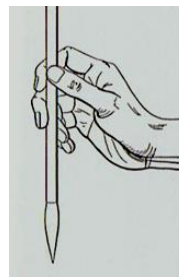
懸腕



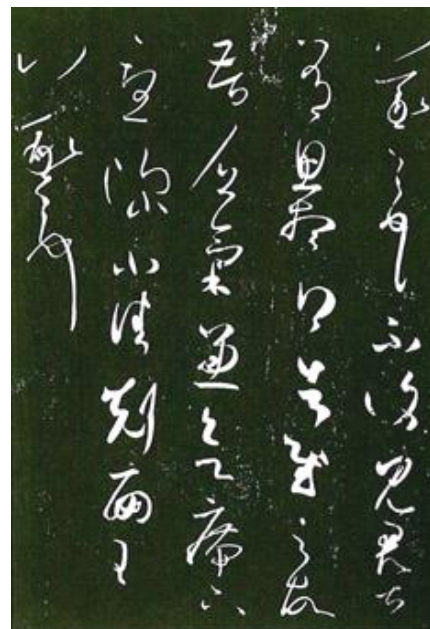
双鉤



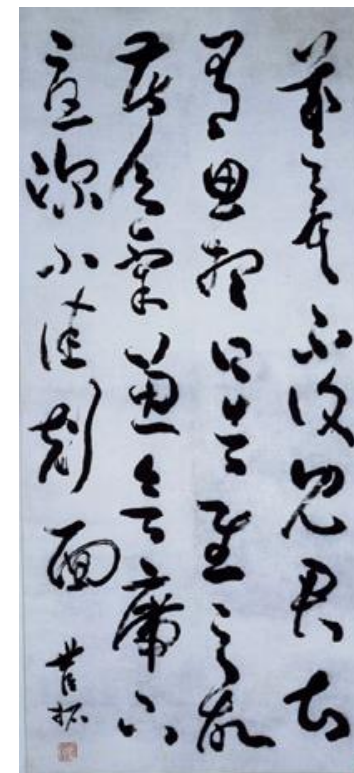
実指



虚掌

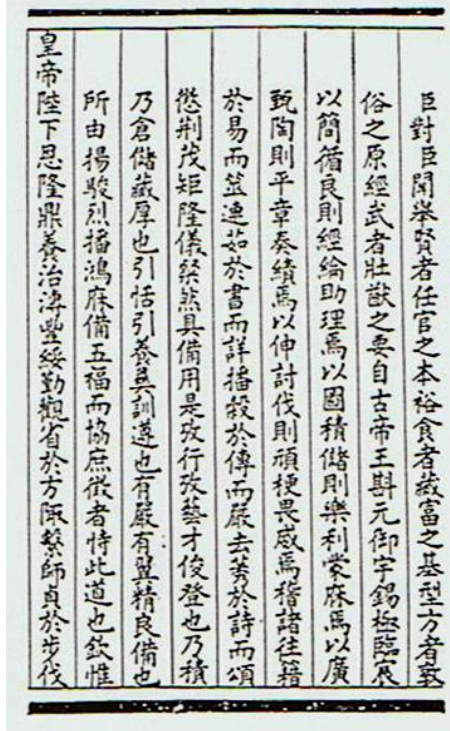


王羲之「思想帖」—余清斎帖—  
「羲之頓首。不復見君。甚有思想。得告慰之。故苦乏氣。兼欲（下）下。憂深。小佳剋面。王羲之頓首。」  
側筆によって縦横転折が書かれている。逆入平出の理論と矛盾しているようだが？



包世臣「臨王羲之思想帖」軸  
135×60 cm 東京国立博物館蔵

「峻落反収」は「峻」は峻落（きび）、「反」は反収（はんしゅう）のこと、峻しいこと。「落」は起筆のこと。「反」は還ること。「収」は収筆のこと、収筆も筆の勢いで反すということである。字の形は用筆に基づいて無限に変化する。(図3)  
「双鉤懸腕」は「双鉤」は「二本がけ」のこと。「懸腕」は腕を浮かす腕法のこと。  
「実指虚掌」は「実指」は五本の指がしっかり筆を支えることである。特に小指が薬指に付いて力を調節することが大切。「虚掌」は筆を持つ手のひらが、卵を包むように力を抜いて、ふんわりと空間をつくることを言う。



科举（殿試）の答案の書 俗体  
 科举の答案を書くための書は、書類を書いたりする字が上手ければよいだけで、芸術性は問題ではなく、通俗的で、書き易く、形式的なものであった。一般に俗体として軽蔑されたい。

【満河走溜】『答熙載九問』より  
 同じ作品を何べんも書き直している、形や細部は整ってくるが、氣と技法が分離して、氣が衰え、生命力を失う。氣が充滿していれば、意識しないで形は上手いくものである。とはいっても、初めから氣満だけあっても書けるものではない。さまざまな技法を学ぶなかで氣満も養われるのである。科举の答案の書は、造形的にはうまいが、生命力のない書の典型である。

吳熙載

1799年（嘉慶4）～1870年（同治9）

包世臣の忠実な弟子。書家・篆刻家



吳熙載像

字は讓之、号は言庵、晩学居士など。室号は「師慎軒」など。  
 この室号は師の包世臣の字の「慎伯」から名付けられた。  
 江蘇省儀徴の生まれだが揚州で育った。父は人相見で生計を立て、家は非常に貧しく、科举受験をあきらめ、生涯布衣として金石研究や書画の制作に専念し、書画や印を売って生計を立てた。

20歳の時、父の客となった包世臣と出会い、以後、彼の弟子となり、生涯、師法を守り、その理論の実践に努めた。55歳の時、太平天国の乱を避けて、揚州の近くの泰州に転居した。65歳の時、若き趙之謙が訪ねてきた。66歳の時、揚州に帰った。この泰州に転居した以外、ほとんど何処にも行かず揚州で暮らし、貧しくとも、悠然として、72年の平凡な一生を閉じた。

包世臣からは、主に楷書と行書を学び、篆刻、篆隸書は鄧石如を規範として学んだ。彼の芸術は、後世、特に趙之謙、吳昌碩、齊白石らに大きな影響を与えた。篆刻第一、花卉画、山水画、篆書、隸書、行楷の順に優れるといわれる。作風は、都会的で端正、繊細、優雅流麗な線が特徴である。



吳熙載は、15歳頃から篆刻を学びはじめ、30歳から鄧石如の印に没頭した。「老実」を正として、その境地に到達しようと努めた。老実とは、ゆがみのない、職人技の極致の姿といわれる。



吳讓之「梅花図軸」63歳





吳讓之「行書對聯」 121×21 cm×2 觀峰館藏

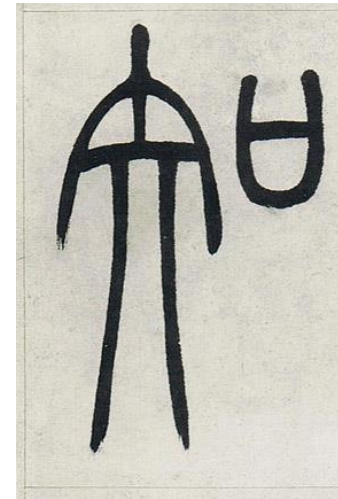
「春花落地閑公案 野鳥啼枝小辯才」



部分



吳熙載「臨史晨後碑」 135×34.5cm



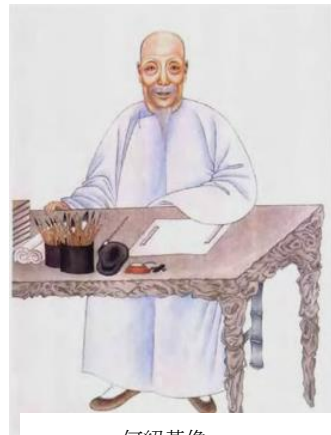
部分



吳熙載「崔子玉坐右銘四屏」  
の第四屏部 個人藏

何紹基

1799年（嘉慶4）～1873年（同治12） 書家、詩人、金石学者、石刻の收藏家、政治家。



何紹基像

字は子貞、号は東洲、猿叟など。湖南省道州（今の道県湘江の支流瀟水の流域にある）の出身だが、祖先は山東省益郡の出という。戸部尚書（財務大臣）の何凌漢の長男。四人兄弟ともに能書で、「何氏四傑」と称えられた。弟の紹業とは双生児。名門のお坊ちゃんである。

彼が8歳の時、父が3番の成績で殿試に合格し、一家は北京に引越し、彼は23歳まで、北京で幸福な日々を送った。母は子どもたちが自由に勉強できるように常に環境を整えた。父は、そのような妻に感謝して、四子に「我が家の根本は汝らの母にあることを忘れるな」と教えたという。1822年（道光2）一家は済南に移った。

済南で何紹基は、毎日のように蔣伯生を訪ねて書画の研究に熱中し、多くの碑文の拓本を蒐集した。この頃（24歳）包世臣に出会い、北碑に目を開かれたのである。1831年（道光11）一家は杭州に移った。この頃、彼は蘇州で「大字麻姑山仙壇記」の宋拓本を入手した。1835年、36歳で、やつと郷試に合格。翌1836年（道光16）北京で会試に合格し進士となり、庶吉士に任ぜられた。庶吉士は翰林官（指導官）のもとで3年間指導を受ける。その時の指導官が阮元であった。以後、阮元の弟子となる。1839年（道光19）翰林院編修（庶吉士で優秀な者が選ばれる部署）に任せられ、秋、福建省郷試の正考官（試験委員長）として福州へ行った。12月弟の紹業が死んだ。翌年2月父が死んだ。1844年（道光24）貴州省郷試副主考官として貴陽へ、1848年（道光28）6月妻が死んだ。1849年（道光29）広東省郷試副主考官として広州へ、12月、82歳で母が死んだ。1852年（咸豐2）11月、成都に入り、四川学政（学務長官）となったが、旧弊の一新をはかる意見書を上奏したが、不穩であるとして斥けられ、1855年（咸豐5）6月、罷免され官界を去った。（57歳）上奏は、俗物達と縁を切るための方便であったようである。その後、何紹基は悠悠自適の生活を送ったようである。免官されてすぐ峨眉山に遊び、続いて長安、北京、済南を歩き、碑を見、詩作した。1857年（咸豐7）済南のラク源書院の院長に迎えられて書院に住んだ。1860年の秋、家族とは別れて、嵩山や太湖に遊び、1861年（咸豐11）2月、長沙に着き、城南書院の院長に就任した。1862年（同治元年）64歳、彼は猛烈に書の勉強をしている。2月、武榮碑と礼器碑を臨書、春、11年ぶりに道州の家に帰ったが、家は太平天国軍のために壊されていた。しかたがないから、桂林に行き、湘水をくだって長沙に帰った。5月、張遷碑の50回目の臨書、7月、張遷碑の60回目の臨書完了、9月、石門頌を臨書、11月、武榮碑を臨書、12月、張遷碑の100回目の臨書、衡方碑の臨書。彼は書の勉強に熱中し、とり憑かれたように中国のほとんどを旅して書の遺跡を訪ね、石碑を見、拓本をとった。1863年（同治2）春、広州へ行き、初めて蒸気船に乗ってアモイ、香港に遊び、西洋人の前で書を書いた。1864年（同治3）江蘇、浙江に遊び、武昌から蒸気船に乗って南京にくんだり、そこから揚州、蘇州、上海、杭州と歩いて翌年5月長沙に帰ってきた。彼は、なぜか「出游」せずにはおられなかったようだ。その後も江南を中心に旅に明け暮れ、1873年（同治12）7月、蘇州で死んだ。伝染病らしい。享年75歳であった。翌年、長沙府善代県の南郷に葬られた。

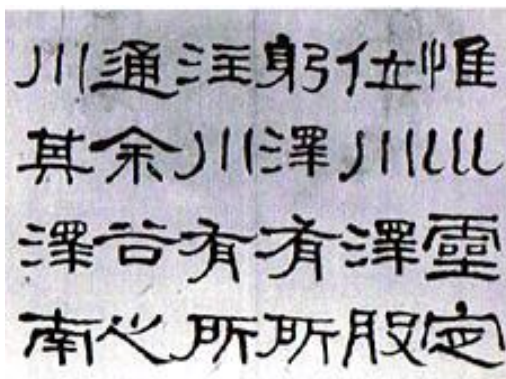
書は、初め、父から、家学である顔法を習い、家訓の「横平竖直」を教えられる。少年時は顔真卿に傾倒した帖学派であったが、のち、包世臣の影響で金石の研究に熱中、さらに、阮元の弟子となり篆隸を極め、碑学派となるが、顔真卿は生涯基準であった。その後、さらに、書の淵源を求めて、北碑や漢碑に学び、独自の書風を確立した。

何紹基の詩集『東洲草堂詩鈔』三十巻があり、二千首近い詩が伝わっている。

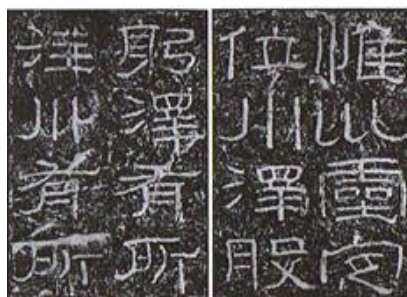




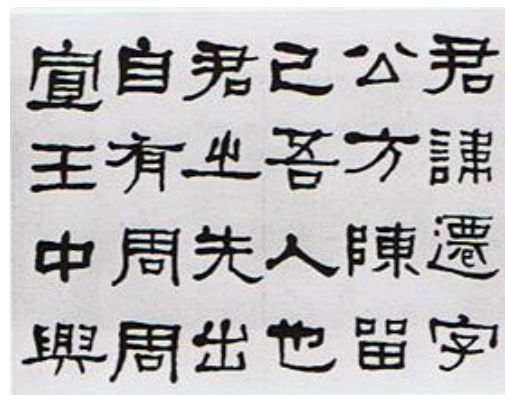
何紹基「臨張遷碑」部分



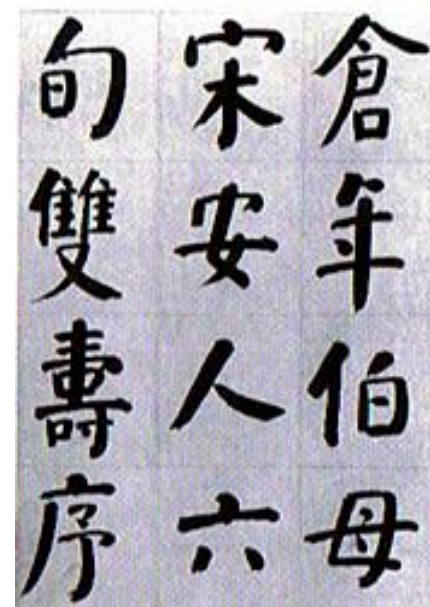
何紹基「臨石門頌」部分 東京国立博物館蔵



石門頌 部分拓本



何紹基「臨張遷碑」部分 東京国立博物館蔵



何紹基「楷書冊」部分 東京国立博物館蔵

何紹基の書の根底には、篆隸の筆法だけではなく、幼少より学んだ、顔真卿の「争坐位帖」、李北海の「麓山寺碑」の影響も大きい。彼は包世臣や阮元の論を否定して、顔真卿や李北海の書を北派として学んだ。

特に顔真卿が何紹基の線の基本にある。また、62歳のときの詩に「私は朝早く起きて、必ず漢碑を臨書するのを日課とした」と歌っているように、ひたむきに臨書し、北碑を通して書の淵源に到ろうと、休むことなく書の練磨に打ち込んだという。特に漢の「張遷碑」と「石門頌」は彼の書学の到達点といわれる。彼は実証精神が旺盛で、拓本を見て臨書するだけでなく、現地に出かけて、実物をじかに見た。

#### 懸臂回腕

何紹基が確立した独自の執筆法である。

1854年（咸豊4）四川の学政のとき、「猿臂翁」と題する詩を作って、学生たちに書法について、「書は懸腕直筆、あたかも強弓を引くような構えでなければならぬ」として、射をよくした漢の將軍李廣の『猿臂』の故事を用い説明した。何紹基はこの時から、自らを猿臂翁と称したらしい。彼は、柔かい長鋒を、側筆をあまり使わず、回腕を高く懸げ、指先に満身の力をこめて、鋒先を逆に突っ込みながら書く、この法は、一字を書くごとに全身汗まみれになると述べている。

彼は、体力のすぐれていた母の遺伝らしく、逞しい体の持ち主だったようだ。

彼の線は、鋒先が紙に食い込むような、細くて勁い線だが、情緒的でもある。

彼は素朴で力あるものを求めた。石門頌ののびやかさと、張遷碑の素朴さを合わせて独創的な書風を創造したのである。

彼は羊毫の長鋒で書いたと言われているが、短鋒も中鋒も使っているようである。





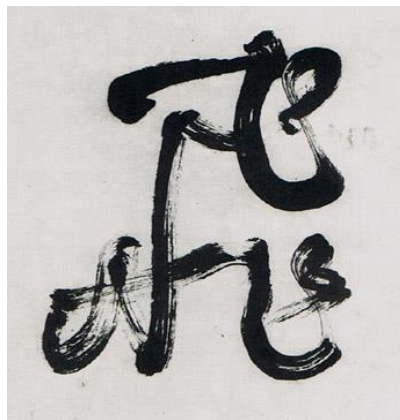
筆



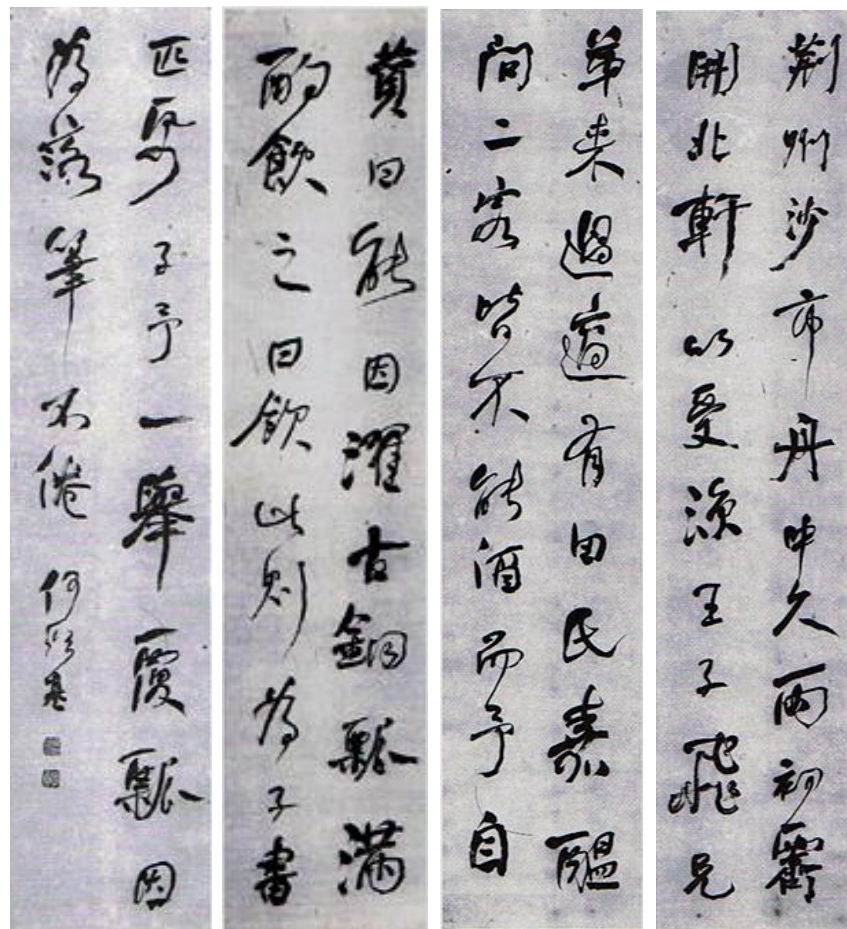
軒



舟



飛



何紹基「荊州沙市舟中久雨初霽行草山谷題跋語四屏」 129.9×28.7 cm

東京国立博物館蔵

顏真卿と隸書、篆書の筆意で書かれている。横画縦画の起筆に篆隸の起筆が出ている。

大きく筆を動かしている。線の最後まで鋒先に感情を込めて書いている。逆筆で重く強く入り、軽く抜いて行く。

連綿はほとんどないが、筆脈は途切れず続き、全体の均衡がとれている。文字の大小、線の粗密、行の変化、自然な墨継ぎ、明るい情緒など学んでも尽きるところがない。

訓読（福本雅一氏）

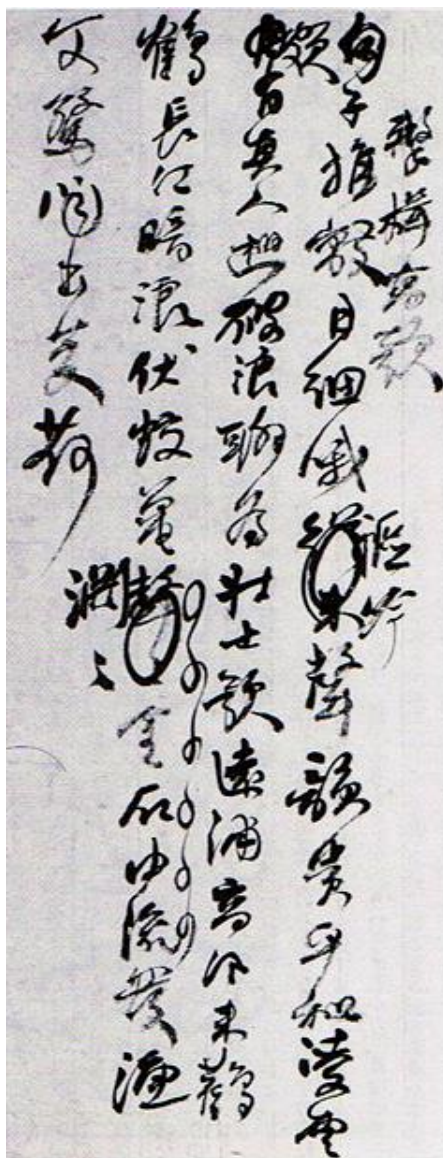
荊州沙市の舟中、久雨初めて霽れ、北軒を開き、以て涼を受く。王子飛兄弟来たりて過り、適たま田氏の嘉うん有り、二客に問うに、皆な酒を能くせず。而して予は自賛して曰く、能く古銅瓢を濯ぐに因りて、満酌之を飲みて曰く、此を飲めば則ち子の為に匹紙を書せんと。子と予は一挙にして瓢を覆す。因為に、落筆倦まず。何紹基。

何紹基は包世臣と阮元の理論を批判して受容し、独自の書論を確立した。

包世臣は唐碑を認めなかったが、何紹基は認めた。また、「横平竖直」の見地から、世臣の側筆ばかりの用筆法を批判した。

阮元は北碑のみを称揚して、王羲之書法を否定し、北派と南派の二系列に判然と分けたが、何紹基は、そうではなく、南北は相互に関係しあい、その書法も南北融合しながら歩んできたのだ、と阮元を批判した。この考え方は、後の康有為の論の先駆である。





何紹基「詩稿」

普段の字は帖学派と同じく、行草書で書かれている。

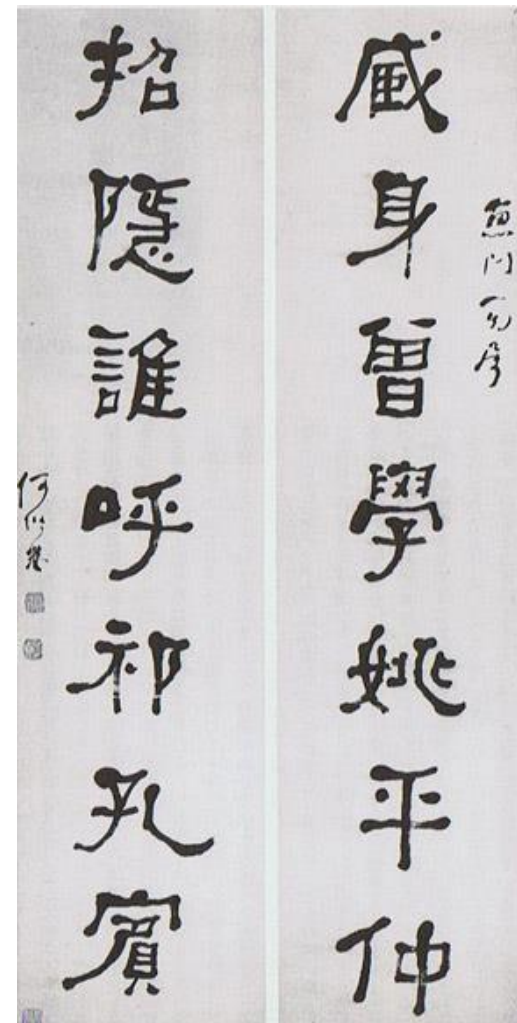


何紹基「行書對聯」124×21 cm 觀峯館藏

「古帖時翻勤歸木 春花未藥自招蜂」



何紹基「篆書四屏・其の3」



何紹基「隸書七言聯」